

仏様のおはなし新シリーズ第137集「死の教育」

皆さまは、デス・エデュケーション。日本語で言いますと「死の教育」という言葉をご存じでしょうか。

これは、日本ではまだ一般的ではありませんが、欧米では広く行われている教育で、この教育の先進国であるドイツでは多くの教科書が作られていますし、アメリカでは小学校のうちからペットの死などを通して、死に関する授業が行われているそうです。

家庭や学校で、学力的に優秀な子どもを多く育てても、その中に自殺や他人の死を思う子がいるのなら本当の教育にはなりません。本当の教育とは生きる喜びを教えることではないでしょうか。そのためには、子どもを死ともつと真剣に向き合わせる必要があります。

死と向き合ってことは、懸命に生きることにつながっています。一度しかない人生、決して後戻りのできない「今」に気が付けば、人は自分自身の在り方を思うことができる。生きる意味について考えるようになる。そのきっかけを与えるとする教育が、デス・エデュケーション（死の教育）です。

日本でこの授業を一年間受けた中学生の声を紹介します。「自分のいのちのことを考へるようになつたら、人のいのちも大事なんだって思えるようになった。これからは時間を大切にして、精一杯生きていきたい」。

「死の教育」。大変意義のある教育だと思いませんか。

ただ、残念なことに子供たちと違つて、大人の私たちには学校でこの教育を受ける機会はありません。しかし幸いなことに、昔から死の教育を行ない。学校の授業では教えない「私のいのちの行き先」まで教えていただけます。お念仏の道場（お寺）があります。

今月と来月は、盂蘭盆会と秋の彼岸会が勤まります。日々の生活に追われて、目先のことばかりに右往左往して、死についても縁起が悪いと考えもしない私たちです。盂蘭盆会と彼岸会では、先立られた方を偲ぶだけではなく、これを機縁として阿弥陀様の願いとお救いをお聞かせいただき、自分の死を見つめ、自分の生き方を省みることによつて、より良い人生を歩ませていだきましょう。



福岡組 検索